

Study on Beliefs of Japanese Language Teachers

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/48126

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



学 位 論 文 要 旨

Dissertation Abstract

学位請求論文題名 Dissertation Title

日本語教師のビリーフ研究

(和訳または英訳) Japanese or English Translation

Study on Beliefs of Japanese Language Teachers

人間社会環境学 専 攻 (Division)

氏 名 (Name) 星 摩美

主任指導教員氏名 (Primary Supervisor) 深澤 のぞみ

(注) 学位論文要旨の表紙

Note: This is the cover page of the dissertation abstract.

This study aims to examine the beliefs rooted in the practical experience of Japanese language teachers within the diverse contexts of Japanese language education. In this study, unlike the traditional definition of belief as a psychological process within an individual's brain, I consider belief as having sociological, cultural, historical, and political origins. I performed a series of five studies in which I discussed the cases of Korean and Malaysian secondary education Japanese language teachers, Japanese native language teachers, and Japanese volunteers to establish three hypotheses that belief is: (1) dynamic, (2) "polyphonic," and (3) social as well as personal. I have also examined the belief-formation process and elucidated the relationships between context and practice, and clarified the prerequisites in practice that are necessary for belief-formation showing objective patterns related to context and belief-formation. In conclusion, I presented the notion of the "belief which has 'polyphony' rooted from sociological, cultural, and historical contexts, being piled up in a multi-layered way." This is different from the usual idea of beliefs that can disappear and/or change inside an individual's head. I believe that this new interpretation of belief will become an effective tool to evaluate the meaning of teachers' practical experience.

1. 研究の目的

本研究は、日本語教師の学びに資することを目的として、日本語教育の歴史的、社会的、文化的、政治的多様性を内包する文脈の中で、日本語教師の実践の文脈と経験、そしてその変化を記述し、その文脈と経験に根差したものであるビリーフを探求するものである。

2. ビリーフとは

教師ビリーフの研究は、認知心理学の発展を背景に盛んになってきたが、その認知心理学において 80 年代半ば、知識や学習を「頭の中」の現象として捉える見方の限界が明らかになり(佐伯 1998b)、認知活動の文脈の重要性や、認知と文脈を一体化して捉える必要性が指摘されるようになった(勝野 2014)。このような認知の捉え方の変化で、ビリーフの捉え方も変化している。

本研究では、ビリーフを、従来考えられていた個人の頭の中の心理作用ではなく、社会的、文化的、歴史的、政治的起源を持つものであると捉え直す。その上で、Dufva(2003:138)の三つの仮説(ビリーフは①個人が遭遇するインターアクションの過程から生じる動的なものである、②個人が経験する多様な文脈の痕跡があり、多声性(polyphony)がある、③個人的視点を反映していると同時に、社会で流通していることがらを反映して社会的でもある)に基づき、本研究におけるビリーフを「文脈に埋め込まれた日本語教師の実践において、人や文脈とのインターアクションの過程を通して生じる動的なもので、その結果、自己の「声」として表れるものである」と仮定し、研究を行った。

ビリーフは、経験を通して形成されるものであり、文脈に強く結びついているという二つの特徴があるが、本研究がビリーフを探究する理由は、経験を通して得られるビリーフと経験はお互いを映し出す鏡のようなものであり、教師の実践の経験を描き出すことによって、ビリーフのあり方も明らかになると考えるからである。また、実践の文脈と強く結びついているビリーフを探究することで、文脈と実践との関係が浮かび上がり、日本語教育の多様性を内包する文脈が教師に与える影響と、その意味付けが明らかにできると考える。

3. 研究課題

本研究では、三つの課題を設定した。

課題 1. 実践の文脈は教師の実践とビリーフにどのように関わっているのか。

課題 2. 実践の文脈の変化によって、教師の実践とビリーフはどのように変化するのか。

課題 3. 実践の文脈の異なり、個人の社会文化的背景の異なりによって、1と2の課題の表れ方は異なるのか。

これらの課題を検討するため、JFL(海外)とJSL(国内)で行われている実践を取り上げ、五つの研究を行った。

4. 五つの研究結果の要約

研究 1: JFL 非母語話者日本語教師研究 1 韓国中等教育日本語教師コミュニティのビリーフ

韓国中等教育日本語教育の文脈とそこで実践する教師のコミュニティのビリーフの関係を取り上げ、「国定日本語シラバス」の転換という教師の実践の文脈の変化とビリーフの変化のあり方、教師の社会文化的背景による異なりを解明するため、2001年と2013年の量的調査結果をもとに縦断的研究を行った。

その結果、国家政策としてトップダウンで導入された新しい考えが、12年の時を経て教師コミュニティの中に教師たちの意識として根付いていることが確認できた。しかし、伝統的な考えの中には、新しい理念と結びつくような形をとったり、そのままの形を保ったりしながら、時を経ても変わらないものもあった。

研究 2: JFL 非母語話者日本語教師研究 2 マレーシア中等教育日本語教師コミュニティのビリーフ

マレーシア中等教育日本語教育の文脈とそこで実践する教師のコミュニティのビリーフの関係を取り上げ、「国定日本語シラバス」の転換という教師の実践の文脈の変化とビリーフの関係、教師の社会文化的背景による異なり、マレーシアと韓国の異なりを解明するため、2014年マレーシア調査と韓国調査の量的調査結果をもとに研究を行った。

その結果、多言語多文化の社会的特徴を持つ文脈では、同じ国の教師であっても、ビリーフ

は言語的背景によって大きく異なっていた。また、韓国とマレーシアの結果は明らかに異なる特徴があり、その要因は、一言語が共通言語として存在し、民族的にも文化的にも異なりが少くない文脈と、多言語多文化の文脈との違いである可能性も考えられた。一方、共通した結果として、教育理念や方法の大きな転換は、5,6年という時間では対応するのが難しいということが明らかになった。

研究 3: JFL 非母語話者日本語教師研究 3 韓国中等教育日本語教師の実践とビリーフ変化とその要因一

研究 1 と同様の文脈で、教師の語りをもとに、教師の実践の変化について記述し、そこに表れるビリーフのあり方と変化を明らかにすることを目的として、2001年と2013年の質的調査結果を分析し、縦断的研究を行った。

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析¹(以下 MGTA) の結果、2001年の実践は、〈教科書〉によって形作られ、それを【日本語学習において大切なこと】と【役割観】のビリーフが支えていることが明らかになった。新しい教育政策の影響は限定的で、実践に結びついていない事例が確認された。

一方、2013年の実践は、〈伝えたい日本語から広がる世界〉と〈ことばとは・ことばの学習・教授とは〉という二つのビリーフが基礎となり、生徒との相互作用によって再構成されていた。実践とビリーフの変化の要因には、新しい知識がきっかけとなるものと、生徒との相互作用によるものがあつた。

この両年の違いには、伝統的に続いてきた教師中心の教育から、教育政策に明示された「学生中心」へ、実践やビリーフが大きく変化しつつあることが示されていた。このような変化は、実践の中に問題を見出し、解決のため「内的説得力のあることば」を求め、実践化できた場合に起こることが確認できた。また、教師に「内的説得力のあることば」を提供し、教師の学びを支援できる力を持つのは教師間のつながりを作るコミュニティであることが明らかになった。

研究 4: JSL 日本人(母語話者)日本語教師研究 1 日本人日本語教師の実践とビリーフ経験の中での変化とその要因一

20年以上の経験を持つ日本人日本語教師の語りをもとに、教師の実践の文脈の変化と、実践とビリーフのあり方と、その変化を解明することを試みた。

MGTA による分析の結果、日本語教師は実践の経験をもとに、【拡張し、深化する実践】を作りあげていることが明らかになった。教師が新しく出会う一つひとつの異なる実践は「人」、「場」、学習観・教育観の多様な文脈を反映しており、実践を重ねていくこと自体が学びの資源

¹ 以下の文中において MGTA の分析によって得られた概念、カテゴリーのことばを使用する場合は、概念は〈 〉、カテゴリーは【 】として表す。

となっていた。教師たちは、実践で多様な背景を持つ学習者と向き合い、その学習者が発する他者の「声」、実践を育む「声」と対話することによって、多様な文脈に根差したビリーフを内化し、多声的で豊かなビリーフをもとに実践を行っている過程を具体的に記述し明らかにした。

研究 5: JSL 日本人(母語話者)日本語教師研究 2 ボランティアとして「地域日本語教育」に関わる人々の活動とビリーフ

ボランティアとして活動する人々の語りから、「地域日本語教育」の文脈の中でのボランティアの実践のあり方を記述し、そこに表れるビリーフのあり方を明らかにすることを試みた。

MGTAによる分析の結果、ボランティアは、ことばや人とのつながりに関する体験をもとに、日本での外国人の立場に思いを寄せ、活動を開始し、外国人と直接向き合いながら活動を構成していた。その活動は、ビリーフ群【過去リソース】と活動を支える人や研修会等の【外部リソース】で支えられている。活動を形作るビリーフ【私を動かすもの】は外からの支配を受けにくい、ボランティアが新しい体験をし、それに価値を見出したとき、新しい文脈に根差すビリーフとして重層的に加わるという変化が見られ、活動の新たな意味づけが加わり、活動は厚みを増し、さらに多様な活動が可能になっていた。

5. 研究から得られた知見

本研究の結果、教師の実践は、学習者との相互作用であり、その相互作用には、学習者によって媒介される社会との相互作用も含まれている。ビリーフは、その実践の相互作用によって形作られている動的なものであること、そして、その一つひとつの相互作用の文脈の声を持つ多声的なものであることが明らかになった。また、社会に流通するマスターナラティブのようなものや、教師のビリーフは、教師が属するコミュニティの中での会話や協働作業を通して共有されることを確認し、ビリーフが個人的であり、社会的であるという側面も明らかにした。

以上の結果は、文脈と実践との関係を具体的に描き出すことによって Dufva(2003)の三つの仮説を実証したものである。

さらに、本研究で新たに得られたビリーフの形成過程に関する五つの知見を以下に示す。

- (1)知識は実践化されて試され、手ごたえが得られた場合、繰り返し実践されることによって新たなビリーフとなるが、その実践化の条件として、教師が①自分の文脈の問題を解決できるという動機を持つこと、②具体化するための方法、手段のイメージを教師が作ることができること、③教師のビリーフに照らして、何らかの手ごたえが得られると期待できること、の三つが必要であること
- (2)教師にとって実践の意味や、大切に思ってきたものを、概念化し、明示化するような「内的説得力を持つことば」が得られたとき、実践の意味は統合され、ビリーフとして形を持つこと
- (3)教師自身の思いが、他者の実践によって意味づけされ、明示的に示されたとき、それはビリーフ

ーフとして形を持つこと

- (4)自分自身の体験によって、すでに内化されていたビリーフが、明文化されている理論や研究成果によって裏付けされたとき、そのビリーフはさらに力を持つこと
- (5)一つの文脈で得られたある意味づけが、別の文脈においても、繰り返し同じであることが確認されたとき、それはビリーフとしてより明確な形を持ち、さらに力を増していくこと

6. 本研究の結論と意義

以上のことから、本論文の結論として、ビリーフとは、従来の個人の頭の中で、消えたり、変容したりするものではなく、社会的文化的歴史的な文脈に根差し、「多声性」を持つものであり、そのビリーフは、消えることなく文脈とともに存在し続け、重層的に積み重ねられていくものであると考える。

教師たちの実践の文脈は、社会的、文化的、歴史的な変化等によって日々変化しているが、過去のものとなった文脈は、個人の中に経験として存在し続ける。つまり、過去のものとなった文脈が消えたり、変化したりしないのと同様、社会的文化的歴史的な文脈に根差したビリーフも消えたり変容したりしているのではなく、重層的に積み重なって文脈とともに存在していると考えられる。

ビリーフはこれまで教師の思考研究において、深層からその実践を支える大きな力を持つものであるとされてきたにもかかわらず、働きや形成過程にはなかなか接近できていなかった。その大きな原因は、ビリーフの捉え方にあったと考える。ビリーフを個人の頭の中の心理的機能として捉えることをやめ、社会的文化的起源を持つものであるという捉え直しをしたことにより、文脈や実践との動的な関係を明示的に記述することが可能になり、その結果、ビリーフの形成過程やその要因に接近することができた。

最後に、本研究の結果から、教師の学びに資するものとして、教師の学びの起点は、文脈の中にある実践を起点とすることと、日本語教育の多様性を資源とし、教師の学びの責任を個に帰すことなく、互いにサポートし合えるようなコミュニティ作りを提案する。

参考文献

- 勝野頼彦(2014)『教育課程の編成に関する基礎的研究報告書 7 資質や能力の包括的育成に向けた教育課程の基準の原理』国立教育政策研究所
- 佐伯胖(1998)「学習の「転移」から学ぶ—転移の心理学から心理学の転移へ」佐伯胖・佐藤学・宮崎清孝・石黒広昭著『心理学と教育実践の間で』157-203 東京大学出版会
- Dufva, H. (2003) Beliefs in Dialogue: A Bakhtinian View. In P. Kalaja and A.M.F. Barcelos (Eds.) Beliefs about SLA: New Research Approaches, 131-151 Netherlands: Kluwer Academic Publishers.

学位論文審査報告書

平成29年2月3日

1 論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専攻 人間社会環境学

氏名 星 摩美

2 学位論文題目（外国語の場合は、和訳を付記すること。）

日本語教師のビリーフ研究

3 審査結果

判定（いずれかに○印） 合格 ・ 不合格

授与学位（いずれかに○印） 博士（社会環境学・文学・法学・経済学・学術）

4 学位論文審査委員

委員長 深澤 のぞみ

委員 加藤 和夫

委員 高山 知明

委員 西嶋 義憲

委員 吉川 一義

委員 _____

（学位論文審査委員全員の審査により判定した。）

5 論文審査の結果の要旨

本研究は、外国人に日本語を教える日本語教師の学びに資することを目的として、日本語教師が持つビリーフについて、多角的な研究をもとに、その特徴や変化を明らかにしようとしたものである。日本語教育は、歴史的にも、社会的、文化的、あるいは政治的にも多様性を内包する文脈を有していることが大きい特徴であるが、日本語教師の実践と経験、そしてその変化を記述し、詳細な考察を加えることで、日本語教師の実践の文脈と経験に根差したものであるビリーフの特徴を浮かび上がらせようとした意欲的な研究である。

研究の主題である「ビリーフ」について、従来、ビリーフは個人の頭の中の心理作用であり変化したり消滅したりするものにとらえられてきた。しかし本研究では、ビリーフというものが、文脈に埋め込まれた日本語教師の実践の中で、人や文脈とのインターアクションの過程を通して生じる動的なものではないかととらえ、様々な視点から研究を行った。具体的には、1. 実践の文脈は教師の実践とビリーフにどのようにかかわっているのか、2. 実践の文脈の変化によって、教師の実践とビリーフはどのように変化するのか、3. 実践の文脈の異なり、個人の社会文化的背景の異なりによって、1と2の課題のあらわれ方は異なるのか、という3つの課題を設定し研究が行なわれている。

これらの課題と文脈の多様性を検討するため、海外における日本語教育（JFL）と日本国内での日本語教育（JSL）の文脈で行われている実践を取り上げ、以下の5つの研究を行っている。研究1「JFL 非母語話者日本語教師研究1 韓国中等教育日本語教師コミュニティのビリーフ」、研究2「JFL 非母語話者日本語教師研究2 マレーシア中等教育日本語教師コミュニティのビリーフ」、研究3「JFL 非母語話者日本語教師研究3 韓国中等教育日本語教師の実践とビリーフー変化とその要因ー」、研究4「JSL 日本人(母語話者)日本語教師研究1 日本人日本語教師の実践とビリーフー経験の中での変化とその要因ー」、研究5「JSL 日本人(母語話者)日本語教師研究2 ボランティアとして「地域日本語教育」にかかわる人々の活動とビリーフ」である。これらの研究は、韓国およびマレーシアの中等教育日本語教師、そして日本国内の20年以上の経験を持つ日本語母語話者教師とボランティアにかかわる人々を対象に、質問紙調査やインタビュー調査などのデータを収集し、分析したものである。日本語教育の大きい特徴は、前述したように日本国内だけでなく、世界を背景としたその規模と歴史的あるいは文化的な多様性である。本研究で、その特徴を映し出すことが可能なデータの収集に成功している

ことをまず指摘しておきたい。

次に、これら5つの研究の研究手法について述べる。韓国およびマレーシアで実施した質問紙調査については記述統計と因子分析の量的分析を行い、韓国の日本語教師と日本語人日本語教師やボランティアに実施したインタビュー調査は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、MGTA と略記)という手法による質的な分析を行っている。また韓国で行った調査については、質問紙調査もインタビュー調査も2001年と2013年と2つの時期で行われており、縦断的な分析が行なわれている。つまり、広範囲のデータを、量的分析と質的分析、さらに韓国における調査は縦断分析も行っていることになり、様々な角度からの考察を可能にしていると言える。

以下、5つの研究の概要を簡単にまとめる。

研究1では、韓国中等教育日本語教師に、2001年と2013年に実施した質問紙調査を、因子分析を用いて考察した結果、「国定日本語シラバス」(日本の指導要領にあたる)としてトップダウンで導入された新しい考えが、12年を経て、しっかり教師の中に根付いていることが裏付けられた。一方で、伝統的な考えも消滅するわけではなく、そのまま保持されたり形を変えたりして存在していることもわかった。

研究2では、マレーシア中等教育日本語教師を対象とした質問紙調査を、因子分析を用いて分析した結果、「国定日本語シラバス」の影響は限定的で、トップダウンで導入された理念は5、6年では対応が難しい可能性があることが明らかになった。マレーシアと韓国と、質問紙調査の結果を比較すると、明らかに違う特徴を持っていることも浮かび上がった。

研究3では、韓国中等教育日本語教師への2001年と2013年のインタビュー調査を、MGTAによって分析している。その結果、伝統的に続いてきた教師中心の教育が、学生中心の教育へ実践やビリーフが大きく変化することが見て取れ、その実践の変化は、教師間のコミュニティで「内的説得力を持つことば」が得られたときに起こることが明らかになった。

研究4では、20年以上の経験を持つ日本人日本語教師へのインタビュー調査の結果に対してMGTAによる分析を行っている。教師のビリーフは、コミュニティにおける協働作業によって明確化されることで力を持ち、その後も実践を支える力を持つようになることがわかった。そして、それは協働作業などを行った他の教師とも共有され、コミュニティ全体のビリーフともなる可能性があることも示唆している。

最後の研究5では、ボランティアとして地域日本語教育にかかわる人々に対するインタビュー調査の結果を、やはり MGTA による分析を行い、ボランティアの活動を形作るビリーフは外からの支配を受けず影響を受けにくい、ボランティアが新しい体験をし、そこに価値を見出したとき、新しい文脈にもとづいたビリーフとして、重層的に加わるという変化が見られることがわかった。

以上の結果から、本論文では、ビリーフとは、従来の考え方のように、個人の頭の中で消えたり変容したりするものではなく、「社会的文化的歴史的な文脈に根差し、「多声性」を持つものであり、そのビリーフは、消えることなく文脈とともに存在し続け、重層的に積み重ねられていくものである」という結論に導く。つまり、教師たちの実践の文脈は、社会的、文化的、歴史的な変化や、教師の移動、学習者の移動等によって日々変化しているが、過去のものとなった文脈は、個人の中に経験として存在し続け、ビリーフは消えたり変容したりしているのではなく、重層的に積み重なって文脈とともに存在していると結論づける。そして教師の学びに資する点として、教師の学びの起点は、文脈になる実践を起点とすべきであること、そして、日本語教育の多様性を資源として、教師の学びをサポートできるコミュニティ作りの重要性にも言及している。

以上述べてきたように、本研究では、これまであまり明らかにされてこなかったビリーフの形成過程や働きについて、人との相互作用により生ずる動的な側面や、教師の活動の文脈が重層的に積み重なる多声的な特徴などを実証することができており、これは大きい成果であり、日本語教育における新しい知見となり得るものだと言えよう。

本論文への指摘として、伝統的な教育手法と新しい手法と、両者を含む語学教育特有の性質の影響などについて、必ずしも十分に議論されていないのではないかという問題が出された。本論文の調査は、グローバル化や IT 化が進む昨今に、語学教育という枠を超えて、教育理念全体が大きく変化しつつある中で行われており、語学教育特有の問題が議論しきれていないのは確かであろう。しかしそれは、教育全体の理念の変化の行方とも関係しており、むしろ、今後継続して、日本語教師のビリーフを観察し続けることの意味を示唆しているとも言える。以上の結果から、本論文は博士論文の水準には十分達していると判断し、合格と判定した。